

北海道教育委員会会議審議概要（令和6年第14回）

1 公開案件の審議

(1) 報告1 令和6年度（2024年度）公立高等学校入学者選抜の実施状況について

ア 説明員 小西学力向上推進課長

イ 結論 報告を了承

ウ 審議内容

【小西学力向上推進課長】

資料2ページを御覧ください。「1 出願者の概要」について、令和6年（2024年）3月の中学校卒業生数が4万966人、出願者総数が2万9,820人、第2次募集による合格者を含む合格者数が2万6,136人となっています。募集人員の定員充足率は82.4パーセントで、前年度より0.2ポイント減少しています。次に、「2 出願者の状況」について説明します。まず、「(1) 一般入学者選抜の実施状況」ですが、全日制については、倍率は0.93倍で、前年度から0.01ポイント減少しています。定時制については、倍率は0.52倍で、前年度から0.05ポイント増加しています。

3ページを御覧ください。「(2) 推薦入学者選抜の実施状況」についてですが、受検者数は7,531人、合格者数は5,299人です。令和5年度（2023年度）に、推薦入試を生徒による自己推薦としており、それ以降、受検者数、合格者数が大幅に増加しています。

次に、「3 学力検査（本検査）結果の概要」です。「(1) 合格者の総合成績」は、全日制合格者の平均点が212.9点で、前年度より15.7ポイント低くなっています。(2)は合格者の教科別平均点を記載しています。

4ページを御覧ください。「4 学力検査問題学習指導要領の内容・領域別平均正答率」についてですが、これは、設問ごとの正答率を、内容や領域別に整理したものです。国語は、学習指導要領の知識及び技能の3事項と思考力、判断力、表現力の3領域別の正答率を示しており、

他の4教科は領域別に正答率を示しています。

5ページを御覧ください。「5 学力検査問題の分析(教科別)」の見出しを3点示しています。報告書本体では、教科ごとに詳しく掲載しており、中学校での授業実践例、義務教育段階の取組を踏まえた高等学校における指導の在り方などを掲載し、中学校及び高等学校の授業改善の方向性を一体的に示しています。

「6 学力検査問題等研究協議会における主な意見」については、学力検査後に、中学校、高等学校の教員を出席者として、学力検査問題の内容について協議をしており、その際に出された意見や要望をまとめたものです。こうした意見を参考に、小学校・中学校において児童・生徒が身に付けた力を適切に評価できる学力検査問題となるよう努めていきたいと考えています。

事務局としましては、本報告書を活用するなどして、各中学校や高等学校が生徒の学びについての課題を把握し、その状況を踏まえた学習指導の改善・充実を図るよう、市町村教委や学校への指導・助言に努めていきます。

なお、本報告書は、事務局のウェブページに近日中に掲載するとともに、小学校や中学校、高等学校等に通知いたします。

説明は以上です。

【中島教育長】

御質問や御意見はありませんか。

【青山委員】

資料9ページで、自己推薦が令和4年度(2022年度)と比べると大幅に増加したということですが、推薦枠を今後も増やしていく予定でしょうか。

【小西学力向上推進課長】

各学校で推薦による合格枠が決まっており、これまでは学校長が推薦しなければならなかったものを自己推薦により受検できるようにした結果、推薦枠を超え倍率が高くなっている学校と、推薦枠の半分ぐらいは埋まっているもののまだ定員を充足していない学校とがありま

すので、推薦枠を大きく増やすというよりは、この自己推薦制度を使って、もっと積極的にチャレンジしてほしいということを周知していきたいと考えています。

【青山委員】

自己推薦は、このために頑張ろうと、3年間の計画を立てられるという点で、大変良い取組だと思います。

【渡辺委員】

5ページの「6 学力検査問題等研究協議会における主な意見」の内容を見ますと、全ての教科に「一層工夫するとともに」や、「一層工夫してほしい」との記載があります。協議会では、具体的な出題内容の議論に踏み込んでいたのだらうと思いますので、その結果については、専門の先生方にお任せしたいと思いますが、全ての教科で「一層工夫してほしい」ということは、工夫が足りないと言われてしまっていると捉えられなくもないと思います。

この工夫の内容というのは、協議会の専門の先生方がこう在ってほしいというところで決まってくると思います。現実には学力検査問題により中学生の学習の在り方が変わってきますので、どういう学力検査問題にするかということが、どのような学力を期待したいのかということにつながるのではないかと思います。是非、出題内容をよりブラッシュ・アップしていただきたいと思います。

【川端委員】

今年度は全体的に、定時制に出願した生徒が多かったのではないかと思います。通信制に出願した生徒も多かったと聞いていますので、自分にとって学びやすい方向性を見いだした子供が多かったのだらうと感じています。

もう一点、学力検査問題について、保護者の立場で現実的な話をすると、中学校で普段行う定期テストの問題と比べ、同じような出題内容であっても、問題文の表現が学力検査問題の方が難しく、学習塾や他の学習教材を活用しないと解けないのではないかと感じている保護者や生徒がいます。今回、このように学力検査問題についての様々な

御意見をいただいておりますので、中学校で学び積み上げてきたものを正しく発揮することができるような学力検査問題の在り方や作り方を考えていかないと、結局、学校の授業だけでは十分な内容を教わっていないと言われてしまうのではないかと感じています。

私立の小学校では、例えば、掛け算において、どんなに桁数が大きくなっても下一桁にこの数字があれば必ずある数字で割り切ることができるなど、数字遊びの中で早解きのアイデアを教えている例や、学びの中に遊びの要素を取り入れているというような内容をニュースで見聞きします。例えばそのようなアイデアを子供たちに伝授してあげることによって、数字の面白さを見いだすこともあるのではないかと思いますので、今一度、学力検査問題の内容も含めて考えていかないと、学校の授業だけで十分な内容が学べるのかという疑問が生じてきてしまうのではないかと思います。

【清水委員】

私も資料5ページのところで、一層工夫する必要があるというところに興味を持ちました。4ページでは平均正答率として、例えば社会を見ますと全体で4割に満たず、低い部分で見ますと英語の「書くこと」や数学の「図形」で20パーセント台となっています。他方で、国語の「言葉の特徴や使い方に関する事項」は61.8パーセント、数学の「数と式」は68.1パーセントと、平均正答率が非常に高くなっている領域もあります。特に、国語と数学は同一教科の中で乖離かいが大きく、極端に平均正答率の高い領域がある一方で、極端に低い領域もあるというところが非常に興味深いと思います。出題者の意図と結果が少し違ったのではないかという気もしますし、問題の出し方もあるのだとは思いますが、正答率については後のページに細かい解説もありますし、かなり丁寧に具体的な設問を基に授業づくりの具体的なポイントも示してありますので、是非参考にさせていただいて、授業改善に生かしていただきたいと思います。

数字というものはいろいろなことを語るもので、学力検査結果に係る様々な数字は、非常に貴重な資料になると思いますので、今後の工

夫に十分に活用いただきたいと思います。

【大鐘委員】

今年度の実施状況の全体像について、詳細なデータが整理されており、非常によく理解できました。学力検査に関して、幾つか意見を述べさせていただきたいと思います。

学力検査は、入学者選抜の1つの大きな尺度であると同時に、中学校段階で生徒に身に付けさせる学力を規定していくものになっていると思います。中学校の授業と学力検査をどう接続させていくか、この報告書を踏まえて、中学校の授業改善の方向を示すということでした。授業改善と同時に、学力をどのように測っていくかという部分も改善していかなければならないと考えます。そのような点で、合格者の平均点や平均正答率が果たして妥当なのかどうかという振り返りは、当然不可欠になるだろうと思っています。詳細な分析をされていますので、各設問ごとや分野ごと、あるいは学力の観点ごとに、詳細に見ていくことができるのではないかと思います。間もなく、全国学力・学習状況調査の結果も出てくると思いますので、それと接続した形で詳細な分析を継続して、研究していただきたいと思います。

もう1つは、この報告書がどのように活用されていくかということが非常に重要だと思います。ホームページに掲載され、中学校にも送付されることになると思いますが、中学校側でこの報告書を受け止めて、それぞれの学校の生徒の実態に合わせた授業改善が実効的に進められなければ、これだけのデータの意味がないことになります。道教委としては、各教科の研修会や校長会等で先導的な役割を果たしていただきたいと思っています。ただ単に周知するだけではなく、この報告書は、授業をどのように構成・構築していくか、学力をどのように考えていくかという大きな議論に拡大していくための1つの貴重な材料ですので、継続して研究していただきたいと思います。

【中島教育長】

ほかに御質問や御意見はありませんか。

《委員から質問・意見なし》

【中島教育長】

それでは、以上で本件の審議を終わり、報告を了承します。

(2) 報告 2 北の専門高校ONE-TEAMプロジェクトについて

ア 説明員 山城指導担当局長

イ 結論 報告を了承

ウ 審議内容

【山城指導担当局長】

今年度の新規事業である「北の専門高校ONE-TEAMプロジェクト」について御説明します。本事業は、静内農業高校が昨年度まで、そして、厚岸翔洋高校が今年度まで取り組んでいるマイスター・ハイスクールの成果の普及を図る目的で実施する、文部科学省の指定事業の「マイスター・ハイスクール普及促進事業」に道教委が採択され、2年間取り組むものです。

はじめに、資料の2ページを御覧ください。本事業は、産業構造が大きく変化している中、産業界と専門高校をつなぐ産学連携コーディネーターを高校教育課に配置し、先進的な取組を学ぶことができる持続可能な連携体制を全道の専門高校で構築することを目的としています。

次に、上段の左側に、「専門高校と産業界の連携における課題」を4点整理しています。こうした課題の解決に向け、本事業では、学校が連携できる企業先の開拓、連携を促進する教員向け研修や企業向け研修の開催、産学連携コーディネーターが連携を支援するといった3つの柱で、専門高校と産業界との連携の充実に向けた支援を進めていきます。

次に、下段の左側にある「産学連携コーディネーターの役割」についてですが、1点目として、専門高校と産業界をつなげる産学連携カンファレンスを企画するなどの人的ネットワークの構築、2点目として、専門高校と産業界のつながりを後押しする産業実務家教員リストの作成、3点目として、洋上風力発電や半導体関連産業などの新たな産業や先端技術を紹介するお仕事ガイドブックを作成し、産業構造の変化に対応することとしています。

資料3ページを御覧ください。中段は、今年度の取組とスケジュールの流れを図で示したものです。記載のとおり、年3回のコミッティを開催するほか、専門高校の代表者が一堂に会するキックオフミーティング、

学校と企業を対象としたヒアリング調査、道の建設部や経済部、建設業協会等の関係機関と連携した教員向け研修、企業向け研修、新たな産業や働き方にスポットを当てたお仕事ガイドブックの作成と配付などを実施する予定です。また、年度末の産学連携カンファレンスにおいては、今年度のまとめとして専門高校の教員と産業界関係者が一堂に会して名刺交換をするとともに、それぞれの課題を共有するなどして、次年度以降における取組の充実を図っていきたいと考えています。

今年度は、6月14日に、教員・企業向け研修の企画や事業の評価改善を行う第1回ONE-TEAMコミッティを開催しました。また、7月8日には、各専門高校の担当者を対象としたキックオフミーティングを開催し、静内農業高校から「マイスター・ハイスクール事業の研究成果」について、静内農業高校の前マイスター・ハイスクールCEOから「専門高校と産業界の持続可能な連携の在り方」について、それぞれお話をいただき、その後、高校教育課に配置している産学連携コーディネーターが進行役となり、「自校における持続可能な産業界との連携」をテーマに、協議が行われました。当日は、オンライン参加も含め、72名の職業学科を担当する先生方、14名の教育局の指導主事が参加し、開催後のアンケートでは、参加者から「知見を広げる情報を得ることができた」、「様々な視点からの話で、多くの気付きがあった」との感想があったばかりでなく、「産業界との連携に向けて、より一層の研修が必要」など、新たな課題を捉える回答もありました。

今後は、産業実務家教員を活用するなどして、産業界と専門高校の連携体制が持続可能なものとなるよう事業を進めていきます。

説明は以上です。

【中島教育長】

御質問や御意見はありませんか。

【青山委員】

受入れ側の企業と高校生がうまくマッチングをして、将来、高校を卒業してすぐに御縁のあった企業に就職した場合に、どのような良い御縁があったのか、仕事内容への発展ができたのか、そういったとこ

るも追跡して情報発信していただきたいと思っています。

ちなみに、この3年間事業を実施していたと思いますが、御縁のあった企業に就職した後の感想などは聞いているのでしょうか。

【今井高校教育課課長補佐】

マイスター・ハイスクール事業に3年間取り組んでいた静内農業高校では、実際に学校が関わった企業に就職した生徒もいます。生徒からは、企業のことをよく知った上で就職できて良かったという声、企業側からも働き手の募集につながったことがありがたいという声を聞いています。

【青山委員】

静内農業高校は、私も視察させていただきましたが、農業に特化した専門高校の名にふさわしい学校だと思いますので、また報告を楽しみにしています。

【川端委員】

資料2ページに産学連携コーディネーターの役割が書かれており、2つ目の「産業実務家教員リストの作成」という項目で「謝金等が不要で出前授業等が可能」との記載があります。関係者の皆さんは、子供たちに接して教えたくないわけではないと思いますが、自分たちの企業を運営していくことも大変な状況の中でお手伝いいただけるような方のリストを作成することは、結構難しいのではないかと考えています。その辺りはどうお考えでしょうか。

【今井高校教育課課長補佐】

既に事業を実施している静内農業高校と厚岸翔洋高校では、マイスター・ハイスクール指定校としての事業をきっかけとして初めて学校と接する産業界の方々に学校の教育活動に関心を持ってもらい、その後も継続的に学校の応援団として学校に関わっていただいているという事例もありますので、そういった動きが広まっていけばよいのではないかと思います。

【川端委員】

分かりました。企業側ではボランティア的な部分があるかと思いま

す。ONE-TEAMプロジェクトは、今後、静内農業高校で実施したマイスター・ハイスクール事業で得たノウハウを基に実施していくこととなりますので、つながりのある様々な企業から状況をお聞きして、どのような事業の組立てをすれば産業実務家教員リストに参加してもらえるのかを分析し、発信していただければと思います。

【渡辺委員】

これまでのマイスター・ハイスクール事業の後継としてのONE-TEAMプロジェクトということで、今後は分野を広げていくということになります。これまで、静内農業高校では農業系の事業を行っていたと思いますが、今後は連携する分野がどんどん違うものに広がっていくこととなります。そうなってくると、このONE-TEAMプロジェクトの成功というものが、産業界と専門高校をつなぐ仕組みの正念場になるのではないかと思いますので、是非、この取組には力を入れていただいて、成功させてもらいたいと思います。

【清水委員】

経済界の方々と話をしていると、昨今は圧倒的な人手不足であり、例えば、次世代半導体製造拠点の建設が道内で進んでいる中で、電気設備関係の会社は、人材確保に相当奔走されていると聞きます。先日も、工業高校の電気科と何らかの接点を持ってないかという話を耳にしましたので、業界としてのニーズは相当あるのではないかと思います。

地域との協働ということは地方の高校でよく話題になりますが、様々な方と話をしていると、道内の都市部の企業は、このように高校と連携・協働ができるということ自体をまだまだ知らないのではないかと感じます。今回のONE-TEAMプロジェクトは、産業界と専門高校とをつなぐコーディネーターがかなり重要であり、産業界では間違いなく相当のニーズがあるのではないかと思います。名刺交換でもよいのですが、様々な形で業界団体との何らかの接点が出てくれば、相当大きな流れになっていくのではないかと思います。

道内では、学校にエアコンを設置する動きが進んでいますが、業者側は、電気設備系の人材が全然確保できていないという問題もあります。

すので、業界からは相当な期待があるのではないかと思います。様々な形でとにかく業界との接点を持つ、PRするというのを続けていけば、かなり大きな流れになってくるのではないかと思います。

【大鐘委員】

各委員がおっしゃったように、このプロジェクトは大変意義のあるものであり、専門高校の機能を大きく広げて、改めてその役割を定義できるようなプロジェクトではないかと思います。地学協働が進められている中で、それと並行して産学協働のような形で、専門高校の機能が大きく発展するようなプロジェクトではないかと思います。資料2ページに記載されているように事業を広げて、普及させていってもらいたいと思います。

要望としては、今年度については拠点校である静内農業高校が発信していくということですが、生徒を前面に出して、更に活躍させていってもらいたいと思っています。また、資料2ページに「ゴールイメージ」と記載がありますが、少し控えめに書かれているのではないかと感じました。期待できる成果はもっと大きいと思いますし、もう少し具体的に、より多方面での成果が期待できるのではないかと感じますので、改めてイメージを練り直した上で、前面に押し出してみてもどうかと思います。よろしくお願いします。

【中島教育長】

ほかに御質問や御意見はありませんか。

《委員から質問・意見なし》

【中島教育長】

それでは、以上で本件の審議を終わり、報告を了承します。